

平塚柔道物語 6 9

## 三羽鳥のライバルと友情

平塚柔道協会 会長 奥山晴治

大野中女子三羽鳥の青木愛・仁藤愛・塩澤茜は、中学の柔道部に入部して初めて柔道を知った。2年目になると県大会で仁藤は48kg級で、塩澤は52kg級で、青木は63kg級で優勝したのである。入部して2年も経たないうちに、県のチャンピオンになったのは何故なのか。私は久しぶりに会った仁藤に聞いてみた。彼女は「真田先生という指導者に恵まれたのです。もう一つはハンパでない厳しい練習に耐えることができたからである」と答えた。さらに「その支えは2人の友人のお蔭である」と語っていた。仁藤と青木は、中学高校6年間いっしょであったので、仁藤は青木に悩みを電話でよく聞いてもらった。そして、青木の的確なアドバイスでいつも助けられたという。青木の方も私に、以前に語っていたのであるが「この問題はこうすればいいのかなあー、と仁藤に尋ねると、そう、それでいいじゃない」と、私の気持ちに、いつも寄り添って肯定してくれた。それが私の柔道人生にも迷わず前進することができた。仁藤はいやし型で心の不安をいつも安定にさせてくれた恩人である」とお互いが友情に感謝している。

さて、塩澤茜は、中学3年生の時に柔道をテーマに書いた作文が、市のコンクールで入賞した。その中にこんな一文がある。「親は応援に来ないことが多かった（父母は休日仕事であったという）。1年生の時の県選抜大会で優勝した時も、3年生の夏に決勝で負けて悔し涙を流した時も、関東大会で優勝した時も、両親は来なかった。負けた時は、よく家で泣いていた。そんな孤独に負けて自信を無くしていた時、いつも青木と仁藤の女子柔道部員が、私を救ってくれた。たぶん、この2人がいなかったら柔道部に入らなかったと思う。というか、柔道の楽しさ面白さを知らないままに生きていたかもしれない。勉強の出来ない私が、家で、学校で、胸を張ってられるのも、この2人のお陰だと思う。仲間でもあるし、友達でもあるし、ライバルでもある。そんな関係が私は好きだ」と作文で「ライバルと友情論」を述べている。

中学3年生の神奈川県大会63kg級で青木

は堂々と優勝した。親友でライバルの塩澤は52kg級で準優勝であった。塩澤はよほど悔しかったのだろう。それをバネにして関東大会で優勝する。ところが青木は第7位と成績がふるわなかった。やや複雑な心境だった時に、真田教師が「今の青木の口惜しさ、初めの県大会で2位の塩澤の気持ちなのだ。そして関東大会での優勝は、青木の県大会で優勝した時の気持ちなのだ。しかし今度は、県大会で全国大会の出場権を獲得した青木がうれし涙を流す番なのだ」と激励した。迎えた全国大会では、青木は3位の栄冠に輝いた。そんな青木も高校時代では、腰を痛め、手術をしたりして、全国レベルの大会で第8位に留まっていた。一方、塩澤は高校2年の時にインターハイに出場し、中学時代に果たせなかった全国第3位の栄冠に輝いた。その点、仁藤はどうだったのか、彼女も高校2年の終わりの選手権大会県予選では、決勝に進出した。そこでの決勝52kg級では、全国第3位の塩澤と対戦することになった。仁藤が48kg級から52kg級に移ったからである。同じ親友同志が決勝に進むことは、青木としてはうれしかったものの、心は複雑であった。結果は、小外刈り効果を取った仁藤の方に勝利の女神が輝いた。青木は、全国大会出場権を獲得したうれし泣きの、仁藤を抱きしめた。そしてその後、負けた塩澤の方に駆け付け、悔し涙の塩澤を抱きかかえた。その時の仁藤はどういう気持ちだったのかを、私は聞いてみた。仁藤は言う。「勝ったものの、心から喜ばなかった。それは相手が塩澤であったからだ。他の選手であったならば、心から喜ぶたのであるが・・・」と語っていた。

— 続く —



左から高木先生、青木愛・塩澤茜・仁藤愛、  
1人おいて真田先生